

ヤマセを愛する友への手紙

根本 順 吉

天気 (2003) 2月号掲載の、6ページ余の力作“「ヤマセ」と宮沢賢治とその周辺”は、私自身に言及された部分もあり、また拙稿2篇を文献としてあげておられます。私は貴兄とかつて話し合ったことを思い出し、なつかしく思いました。しかし、読み進むうち、納得のゆかぬ部分がかかなりありましたので、以下コメント致しますので宜しくお願いいたします。

- 書き出しの章で、貴兄は私と話し合ったことを述べていますが、そのとき、貴兄はわざわざ傍点までふられた夜魔という言葉は使っておられたかどうか、記憶力の低下している老生には、それは全く頭になかったことです。貴兄との対話において私自身、闇風はすでに使っており、それについての私の文献は卜藏氏もあげておられるので確かですが、夜魔という表現は今度の原稿で始めて知り、驚いた次第です。コメントの一つをここにおきますのでどうか宜しくお願い下さい。
 - “ヤマセ”の語源については柳田国男、関口武両氏の独立した考証、成書があります。きわめて重要と思うこの労作について、一言もふれておられぬのは、どうしてでしょうか。
 - たとえば柳田氏は日本全国各地から多数の用例を求められ、それらは南風は少ないが、残りの北風の場合にも風向にはバラツキがあるとされました。ヤマセとして1語、固有名とするからには、風向以外に何か共通の性質を考えねばならぬとされました。
 - “ヤマセ”の語源を求める場合、氏は古語辞典等をあげておられます。しかし、辞典はその時代までの、その用語の要約のような内容で、複雑な語源を調べるのに役立つほど調べ込んで書かれていないのが通例です。
 - “ヤマセ”の語源をたどる場合、江戸時代に菅江真澄がすでにこれを多用しておられることに触れてもおられません。
- そこには卜藏氏が全く無視されている山瀬という用例も沢山あります。瀬とは谷合の狭い部分を言うのであり、そこから吹き出してくる谷風のような場合にも言うのであって、そうすると各地で風向きが様々になっていることも理解できます。
- “ヤマセ”の沈黙の根拠として、明治末から昭和の始めにかけ版を重ねた岡田武松の『気象学講話』と『気象学』があげられます。そこにおいてはヤマセは北海道南部の函館から根室方面の海岸で吹くフェーン風がその主流となっています。私自身、岡田氏以外の人による文献的根拠を知りたい。
 - 宮沢賢治はそのどの労作においても、“ヤマセ”の“ヤ”の字もまったく使っていない。『グスコブドリの伝記』などの作品においてヤマセ的現象については述べられていても、ヤマセの固有名はどこにもない。そこに故意の沈黙を考えぬ限り、これはいかにも不自然で不思議なことだと思う。その故意として、前記岡田武松等の中央権威者による“ヤマセ”の別解釈に対して、積極的に異を立てぬということがあったのだろうか。
 - 関豊太郎には1か所だけ“ヤマセ”と仮名をつけた文献があるというが、これだけで“ヤマセ”の学的進出の冒頭に立ち、第2に賢治の沈黙にも説明できる根拠となるのだろうか。
 - 学史的関心の比較的薄い気象学会において関豊太郎の論文発表から100年を記念し、2007年に盛大なイベントを開くことに反対はしないが、その前に、たとえば卜藏氏が先頭に立って“ヤマセ”の実体や語源について大掃除する必要があると思う。そうしないと学会は咫尺も弁せぬ大混乱におち入り、単なるイベントだおれに終わってしまうことが懸念される。あつかましくも老骨の1つの申出として、拙著「超異常気象」(1994)所収の“ヤマセは山背か?”を読まれんことを。そこには、はっきり将来につながる“ヤマセ”の論点が整理されているから、卜藏氏のこの力作と併せ読まれんことを望みたい。